

---

# 小説の木

澄田 康美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小説の木

### 【Nコード】

N52660

### 【作者名】

澄田 康美

### 【あらすじ】

小説の木、それは、作者が見つけた、儂くて、とてもきれいな木

(前書き)

みなさん、この小説に目を向けていただき、真にありがとうございます。

この小説は、作者である澄田康美が、必死になって書き上げた話です。

どう思ってくれても構いません。

ただの自己満足になっているかもしれない。

それでもいいんです。

もし、少しでも、あなたの心に残れば

それで作者は満足です。

では、お楽しみくださいませ。

そう言えば、あれから一年経ったんだ

わしがこうして小説を書き始めてから

正確に言えば、投稿し始めたのは今年の8月の最初

友人のバクテリアの誘いから、始めてみたんだ

最初は自己満足を見てくれる人がいたら面白いかな程度の気持ちだった

だけど、小説を書いている内に、自己満足な気持ちは変わっていった

もっとうまくになりたい

もっと多くの人に見てもらいたい

もっと小説の世界を知りたい

一年ほど前、何となく小説を書いていた時とは違う

明らかな心情の変化

その過程で、わしは多くの人と知り合った

名前を挙げていいのかわからないけど、多くの人達に

最初は銀さんだったかな？

確か感想を書いてくれて、嬉しくなった事を覚えてる

その次に、わしと色々近い感じのする零岬さんを知ったと思う

零岬さんはどう思ってるだろうね

荒井師匠は銀さんを經由して知った

師匠に会ってから、わしは変わっていった

その時から、わしはもっと他の人を知ろうとし始めた

黒神猫さんがその最初

文才はあるけど、まだ足りないって感じがしていた

次はわしと同じく三人の人を幻想入りさせていた上海二一トさん

ギャグが面白くて、声を出して笑ったのを覚えている

アニメ冒険家さんは、感想をくれて、話を読んでも言われて知り合  
った

なのは正直わからなかったけど、知らない世界を知れて面白かった

小説は読んでないけど、

ガンアークさんもわしの小説を気に入ってくれてる

目に見えるファンって、むずがゆいけど嬉しい

霊刀村雨丸さんは、わしがあれこれ言っつて、その文才を開花していった人

あ、こんな事言っつたら、霊刀村雨丸さん気を悪くするかもしれないかな

上から目線は、自分もやめたいとつくづく思っている

YOさんは、これまた自分との共通点があったので、

話に引き込まれていった。

これぐらい清々しい小説は、わしも見習ってみたいと思っている

シユンさんは自然とみんなから愛されている話を書いている人

ある意味では、わしの目指している理想なのかもしれない

忘れちゃいけないのが、最近リア友だと知ったルシファーさん

まだアカウントは取ってないらしいけど、そのうち取るらしいって

その時は、ちゃんと小説の評価とかしてあげたいね

ナイトホークさんは、アーマードコアの奴を気に入ってくれた人

二次小説ではまだまだマイナーなだけに、大切にしたい人です

世紀末敗者寸前さんは、名前を見た時に思わず笑ってしまった

失礼だと思ったけど、個性的だなあって思った

そんな個性豊かな人達と知り合って、今のわしがいる

え？じゃあ、今のわしはどうしてるかって？

そうだね、夢か現実かはつきりしない空間で、ぼーっと突っ立ってる

多分ここは、現実と小説の世界の狭間みたいな所じゃないかな？

その世界を、わしはとりあえず歩いた

一歩一歩を踏みしめて歩いた

ぼーっとしてるだけじゃ駄目だと自分に言い聞かせて

とりあえず歩いた

地面を踏む音はまったくしていなかった

わしは短い髪と頭についている犬耳を揺らして、ただ歩いた

真っ暗な空間と、不思議な色をした地面

その色为例えようとしても、青から黒、黒から赤と

地面はどんどんその色を変えていく

光り輝きながら

どンドン色を変えていく

だから、例えるとか出来なかった

あえて言うならそうだね、虹色に見えた

電気でチカチカと光る、虹に見えた

なんでそんな風に色が変わっていくのか

わたしには不思議で仕方なかった

足を止めて、じっと地面を見ていると

わしの後ろから、誰かが声を掛けてきた

「来てたのね、澄田」

聞き覚えのある声だった

それも一度や二度じゃない

何度も何度も聞いた声である

わたしは地面を見るのをやめて



声のした方にそっと振り向いた

そこにいたのは、やっぱり見覚えのある子だった

緑の短髪に、虫の羽のようなマント、そして、特徴的な頭の触覚

男の子のような服装をしたその女の子は、わしに近づいてきた

ゆっくりと、色が変わる地面を踏みしめて

心なしか、その子が歩いた地面は

自然と色がにじんできているように見えた

わしより身長の高いその子は、わしの目前まで来ると

わしの腕を優しく掴んできた

そのまま、わしをどこかへ引っ張るように走り出した

慌てるわしを無視して、その子はわしを引っ張り続ける

わしはその子の足に合わせて、その子について行った

ただついて行った

少しもしない内に、わしの目の前には

たたとえばもない物が広がっていた

地面が光るのに合わせて、鈍く光る大きな木

木の枝は無数の枝を伸ばし、いくつもの実を実らせていた

わしは、その木に釘付けになっていた

自分の中の物が、全部吐き出されるような感覚

圧倒的な開放感が、わしの中を駆け巡っていた

そんなわしに、連れてくれてた子は無言でわしの服を引っ張ってきた

その子が指差した先には

わしの前にあるような木が、いくつもあったのだ。

みんな同じように光っていた

幻想的に光っていた

大きさや実っている実の数は違えど、みな一様に輝いていた

その風景に、わしは思わず涙を流している事に気がついていて

とめどなく溢れる涙を

わしは眼鏡を外して目頭に手を当てて、隠そうとした

目の前にあの子一人しかいないけど

ついわたしは恥ずかしくなっていたのだ

その子は隠しているわたしの手をそっとどけて

ニコツと笑いかけてきた

その笑顔を見た時

わたしの涙は止まっていた

それも一滴すら伝わらないほど

わたしは自然と笑顔になっていた

笑顔に涙は似合わない

体がそう察してくれたのだろうか？

笑顔を返した後で、その子はそっと踵を返し

楽しそうにステップしていった

わたしはその後ろ姿に、思わず声を掛けた

声を掛けた理由は、単純な事である

「ねえ、ここはどこなの？」

そうだ、わしはここがどこかわからない

だから、もしかしたらこの子は何か知っているのではないか

内心そう思ったわしは、何の躊躇もなく、その質問をぶつけたんだ

その声を聞いてくれたその子は、振り向きもせずに答えてきた

「じじは、澄田の世界よ」

「わしの世界？どついう事？」

その子が言った事が、わしにはわからなかった

だって、見も知らない世界が、いきなり自分の世界だなんて言われて

納得できる方がどうかしている

それを察してくれたのか、その子は丁寧に説明をしてくれた

「この世界は、澄田の心の奥にある世界

だから、澄田が知らないのは当然よ

だってここは知る事ができたのは

澄田が自分と向き合えたから

色んな人を知ったからなのよ」

その子の言った事は、わたしにはますますわからなかった  
知り合えたから知った？

向き合えたから知った？

答えが出ないまま、わたしは次第に頭を抱えて

その場につずくまってしまった

訳がわからなくなったわたしは

現状を直視する事を拒否してしまったのだ

全てが怖くなりそうならわたしの心に、その子は優しく手を差し伸べて  
きた

そして、わたしを救う為の言葉を、並び立ててきたんだ

「おびえないで、前を見て

ここはあなたの世界よ

その目でしっかりと見てあげて

きつとあなたなら

この世界がわかるから」

わたしはどうか自分を奮い立たせて

差し伸べられた手を掴み、立ち上がった

立ち上がった後で、わしは率直な疑問を

その子に尋ねた

尋ねずにいらなかったのだ

「ねえ、この木々は何？」

「この木々はね、色んな人が描いた世界その物よ

一番近くにあるのが、あなたの世界の木よ

ほら、実っている実の一つを見てみなさいよ」

そう言われたわしは

言われるがまま

実っている実の一つに目をやった

小さくて見えづらいけど、確かに何かが見えていた

それは、わしに見覚えのある物だった

そうだ、これはわしの書いた小説のキャラクターだ

うっすらであるが、わしは何とかそれを確認できた

わしが描いた世界のキャラだからこそ

それがはつきりとわかったんだ

わしはその時にようやく、あの子が言った事がわかった気がした

—————この木は、わしの集大成みたいな物なんだ

他の木は、わしの知り合った人や、まだ知らない人が描いた世界なんだ

それがやっとわかったわしは、自然と心が安らいでいた

地面に腰を下ろして、わしは木を眺めていった

ただ眺めていった

眺めているうちに、自分の意識がまどろんでいる事に気がついていた

わしの瞼が閉じそうになった時に

あの子がぼつりと

わしに言い残してきたんだ

「澄田、あの木、大切にしておいてね

あの木をもっと大きくするのも

もっと光らせる物にするのも

添え木をするのも

腐らせるのも

剪定するのも

全てはあなた次第だからね」

そう言われたわしは、声に出さずに、ただうなずいた



「……きてー!!起きてよ澄田!!」

わしの事を、必死に呼びかける声がしていた

声の主は、夢に出てきた子とまったく一緒

つまり、わしが聞き慣れた声をさせた子である

どうやらわしは、自分の布団でぐっすりと眠っていたようだ

しかし、起きるのが正直たるいわしは、起きる事を全力で拒否した

「ん……まだ眠いの……」

わしの態度がよほど気に入らなかったのか、その子はぶつつんとした後

わしの布団をはがしにかかってきた

「いい加減、起きなさい!!」

掛け布団はあまり広くない部屋に舞い、わしの体は晴天の元にさらされた

「ひいひい!?無理矢理起こすとかひどくね!?

もっと優しく起こしてよ、リグル!!」

「今何時だと思ってるのよ!?!いいから早く着替えなさい!!」

平日だから、リグルはいつもより厳しい

わしはしぶしぶと服を着替えて、学校へ向かう準備を始めた

教科書の整理をしながら、わしは夢の中の事を

何となく思い出し、一言、つぶやいたんだ

「そつだ、あの木の名前、小説の木なんて名前がいいね」

我ながらいいネーミングだなと感心して

わしはいつもの日常を過ごしていくのであった。

## （後書き）

### 感想

どうでしたか？わしが頑張ったこの小説は？

これでも今までの書き方とは一風変えてみたんです

具体的に言えば、師匠と同じ形ですね

難しかったですけど、これでも本当努力はしていました

とりあえず、わしが学ばせてもらった事は一つです

それは、自分をしっかりと見る事です

他の事は、ああ、それぐらいは知っているなと思って見ていたのですが

これだけはどうにも気づけなかったのです。

わしは皮肉にも、文章力等は自意識過剰ではなく

既に一定のレベルであった事がわかったのです

だから、わしに足りない物が何だったのか、必死になって探してみました

恐らく、自分を見ていなかった事が一番足りない事だと

わしは思っつて、この話を書きました

それでも、やっぱり第三者の目と助言は必要ですね

ですので、他の小説もついでに、厳しい感想よろしくお願いしますね

スペシャルサンクス

黒詩鳥さん

バクテリア

銀さん

零岬さん

荒井師匠

黒神猫さん

上海ニートさん

アニメ冒険家さん

ルシファーさん

ガンアークさん

霊刀村雨丸さん

YOさん

シュンさん

ナイトホークさん

世紀末敗者寸前さん

リグル

あ、最後にアンケートです

今書いている小説なんですけど、この小説みたいに書いた方がいいですか？

それとも今まで通りの方がいいですか？

正直にお願いしますね

後、感想は良い点悪い点はしっかり書いて欲しいんですけど

一言はみなさんで自由にやってくださいね

ぶつちやけますと、やりたいようにやってほしいんです。

その方が、気楽でいいと思いますので。

では、このような粗末な駄文をお読みいただき

真にありがとうございます(#^|^#)

by 澄田 康美

ps、わしつて、どんなジャンルが向いているんでしょうか？

後、真面目キャラとふざけキャラのどっちがいいですか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5266o/>

---

小説の木

2010年10月26日20時48分発行